

動作動詞句を形成する「形容詞ク形＋する」

田 川 拓 海

1. はじめに

1.1. 目的

本稿では、現代日本語（共通語）における「形容詞ク形＋する」という形を持つ句には多くの形容詞において可能な状態変化動詞句を形成するものの他に、特定の形容詞に限って可能になるものが存在することを示す。具体的には、(1a) のように動作動詞句を形成するタイプと、(1b) のようにテイル形でのみ可能になるタイプがある。本稿ではさらに、動作動詞句を形成するタイプの特徴について記述的整理を行う。

- (1) a. 太郎が花子に優しくした.
- b. 太郎が忙しくしている.

1.2. 考察の対象：状態変化タイプと動作タイプ

(2) に示すように、形容詞（句）を動詞（句）化するには、様々な手段がある。

- (2) a. 太郎が太った. (太い)
- b. 太郎がスープを温めた. (温かい)
- c. 太郎が部屋を明るくした. (明るい)
- d. 太郎が花子に優しくした. (優しい)
- e. 何気ない一言が太郎を悲しく した／させた.

(2b) に現れる -me/-mar 形容詞派生動詞については、たとえば斎藤 (1992)、井本 (2008)、杉岡 (2009) など、語形成の観点から研究があるが、一方で (2c, d) のような「形容詞ク形＋する」(以降、「Aくする」とする¹⁾) の形を取る場合の、動詞句そのものの性質についてはFukumitsu (2001) など数が少な

いようである²。

さらに (2c, d) を詳しく見ると、表面的な形は同じであるが、動詞句としての性質は異なっている。すなわち、(2c) の「明るくした」は状態変化 (の使役) を表しており、(2d) は動作を表しているようである。両者の違いは次のように自他対応に現れる。

- (3) a. 部屋が明るくなった。
 b. 太郎が部屋を明るくした。
 c. 太郎が花子に優しくなった。
 d. 太郎が花子に優しくした。

(3a, b) は典型的な使役起動交替 (自他交替) のペアになっているが、(3c, d) では「なる」と「する」のみが変わっただけで項の増減は無い。また、(3b) が (3a) + 使役の意味を持つと同じように (3d) が (3c) + 使役の意味を持っているとは言えない。

両者の違いに関するさらなる記述は後述するが、以降、(2c) に類するものを「状態変化タイプ」、(2d) に類するものを「動作タイプ」と呼ぶこととする。

「Aくする」に共通の特徴としては、句的性質と形成の透明性が挙げられる。

まず、(4) に示すように、「Aく」の部分と「する」の部分にはとりたて詞を介在させることができる。これは、「Aくする」が語ではなく句であることを示している。

- (4) 太郎が部屋を明るく さえ／も／は した。

また、-me/-marによる動詞句形成には (5a, b) に見られるような意味的な制限が存在し、形容詞から動詞の形成は必ずしも透明ではないことが知られている (杉岡 (2009)) が、「Aくする」にはそのような制限はなく、形容詞述語文から透明な形で状態変化を形成することができる。(5a) のように形容詞句が可能であれば (5c) のように動詞句の形成が可能であるし、(5d) のように形容詞句が不可能であれば (5e) のように動詞句の形成も不可能である。これは、(5f) のように -me/-mar による動詞句形成は形容詞句が不可能な場合でも成立する場合があることと対照的である。

- (5) a. フェンスが高い.
 b. *フェンスが高まった／*フェンスを高めた.
 c. フェンスを高くした.
 d. *その噂は広い.
 e. *噂を広くした.
 f. 噂を広めた／噂が広まった.

2. 動作タイプとその性質

2.1. 動作タイプの外延

上述した動作タイプを形成する可能性がある形容詞としては、次のようなものが挙げられる。(6a) が最も典型的であると考えられる3つの語で、(6b) が形容詞、(6c) が形容動詞の候補である。

- (6) a. 太郎が花子に 優しく／冷たく／厳しく した.
 b. うるさくする, やかましくする, とげとげしくする, よくする, …
 c. 静かにする, 親切にする, 不愛想にする, 好きにする, 大事にする, Aげにする, Aそうにする, …

これらの語³は(7)に示されるように、状態変化タイプも形成できるという点には注意が必要である。形容詞(のタイプ)と状態変化タイプ／動作タイプの対応は必ずしも一対一ではない。

- (7) 太郎は急に声の調子を優しくした.

2.2. 動作タイプの特徴1: 事象の限界性

動作タイプの特徴として、まず事象(event)に限界点が無いという点が挙げられる。

- (8) a. 太郎が花子に 二日間／#二日(間)で 厳しくした.
 b. 太郎が部屋を 二時間／二時間で 明るくした.

(8a)に生起している期限を表す副詞句「二日(間)で」はいわゆる「開始読み」

としてなら許容可能であるが(中谷・影山(2009)), (8b) に示されているような事象の終了限界点を修飾することはできない。これは必ず事象に終了限界点を持つ状態変化動詞とは異なっており、動作タイプが基本的に事象の終了限界点を持たない動作動詞句を形成しているという本稿の提案を支持している。

2.2. 動作タイプの特徴2: 生産性

動作タイプの2つ目の特徴として、句であるにも関わらず、形成が可能な形容詞の種類に制限があるという点が挙げられる。つまり、語形成にしばしば見られる生産性の低さが観察されるのである。

下記の例で示すように、意味的に動作タイプを形成できそうでも不可能、あるいは許容度が低いものが存在する。

- (9) a. 太郎は明るい／冷酷だ。
 b. * 太郎は 明るく／冷酷に した。
 (cf. ?? 太郎はパーティーの間中明るくしていた.)
 c. 太郎は 明るく／冷酷に ふるまった。
- (10) a. 太郎は娘に甘い。
 b. ? ~ ?? 太郎は娘に甘くした。
 c. 部長の娘だと思って甘くしたのがいけなかった。
 (三田薫子『女恋坂』⁴)

(9c) に示すように、「明るい」「冷酷」は形容詞文ではガ句の性格を表すという点で動作タイプが可能な「優しい」「冷たい」などと意味的に似ており、また「ふるまう」とも共起するが、「Aくする」の環境では(9b)に見るように許容されない。文脈や共起する表現を整えてもそれほど許容度は上がらないようである。また、「甘い」も(10b)に示すように「明るい」「冷酷」ほどではないが「Aくする」の環境では許容度が低い。(10c)のように実例も見つかるが、これは前文脈があり、「する」が代動詞として機能している可能性がある。

動作タイプの「Aくする」がおおよそ「Aと表わされるような内容の態度を示す／ふるまう」という意味を持つなら、もう少し多くの形容詞がこのタイプの動詞句を形成できて良いように思えるが、実際にはそうではない。これは状態変化タイプが非常に生産的なのと対照的で、動作タイプは句を形成するにもかかわらず、一種「語彙的」な性質を持っていると言える。

2.3. 動作タイプの特徴3：項の現れ方

動作タイプの3点目の特徴として、二句などの項を取れるかどうかが形容詞の性質に大きく依存しているということが挙げられる。

- (11) a. 太郎が 花子に 冷たい／冷たくした。
b. 太郎が (*花子に) 静かだ／静かにした。

(11a, b) の対比に見られるように、「冷たい」のように形容詞が二句を取ることができれば「Aくする」の場合も二句の生起が可能であるし、「静か」のように形容詞がそもそも二句を取らない場合は「Aくする」の環境でも二句の生起は不可能である。これは2.2で見た「語彙的」な性質とは異なり、形容詞から「Aくする」が合成的に形成されていることを示唆している。

一方で、ヲ句に関しては、形容詞句と動詞句で格パターンの現れ方が異なる組み合わせもある。

- (12) a. (太郎(に)は) そのおもちゃが 大事だ／大切に／好きだ。
b. 太郎は そのおもちゃを 大事に／大切に／好きに した。
c. みなさんほど音楽を好きな人はいません (『月刊歌謡曲』335号)

(12)に見られるように、「大事」「大切に」「好き」の場合「Aくする」にすると、形容詞句の環境ではガ句で現れていた項がヲ句で現れる。ただしこれはヲ句に限って観察されるパターンであり、また「好き」については(12c)に示すように動詞ではないにも関わらずそのままでもヲ句を取れることがある点を考慮し、上述した二句の問題とはひとまず分けて整理しておいた方が良いと思われる。

3. テイルタイプの存在

「Aくする」の記述において、ここまで検討してきた状態変化タイプ／動作タイプという動詞句の意味的性質を基準にした分類とは別に、述語の形態を基準としたタイプを立てることを提案する。それは次のようなものである。

- (13) a. 太郎はあわただしく *した／している。
 b. 太郎は忙しく *した／している。
 c. 太郎は寂しく *した／している。
 d. 太郎は幸せに *した／している。
 e. 太郎は暇に *した／している。
 f. 太郎は退屈に *した／している。

(13) に挙げた形容詞はすべてテイル形においてのみ「Aくする」の形成が可能であり、ル形／タ形では不可能である。これらを「テイルタイプ」と呼ぶこととしたい。

テイルタイプは上述したように述語の形態に着目した分類なので、状態変化タイプ／動作タイプの分類とは重なる可能性もあるが、一部の語に限られるという点では動作タイプに類似している。一方で、ガ格句が形容詞部分で表される状態にあるという点では状態変化タイプとの関連がうかがわれる。ガ格句にヒト名詞を取るの、「ガ格句が自分自身をAの状態に置いている」という再帰的な特徴を持った文であるという分析も考えられるが、「退屈に／暇にしている」ではガ格句の意図性／動作主性があまり感じられないため、そもそもテイルタイプは均一なクラスを成しているのかということも含めて、記述的な整理を進めていきたい。

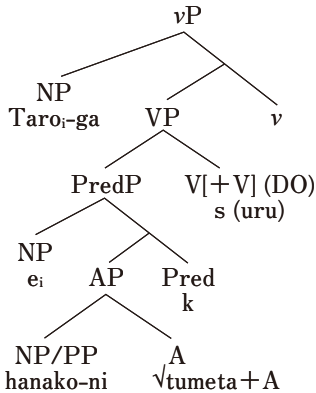
また、テイルタイプはテイル形であるため、2.1で用いた期限句によるテストがそもそも適用可能なのかというような点から検証していく必要がある。本稿ではこれ以上踏み込まないが、(13)の各例の成立には他にも眼前描写や状態性等の性質が関わっている可能性も考えられる。形容詞そのものの特徴・分類(外崎(2005), 村上(2012)など)との関連も合わせてさらなる検討が必要である。

4. 分析案と動作タイプの統語的性質

4.1. 補部か付加部か

動作タイプが提起する興味深い問題の一つとして、「Aく」の部分は統語的に補部なのか付加部なのかというものが挙げられる。この「Aく」の部分は省くことができないため、その点では補部ではないかと考えられる。統語的分析としてはたとえば次のような構造を仮定することができる。

(14) 太郎が花子に冷たくする



ここでは、2.3で見た項の引き継ぎを考慮して「太郎が花子に優しくする」が統語的に「太郎が花子に優しい」を含み込んでいる構造となっている^{5,6}。

ここで問題となるのは、PredP (「Aく」) の部分は構造的には補部であるが、意味論的には様態副詞に近いのではないかという点である。様態副詞が動詞句に付加することによって認可されると考えると (Baker (2003) など), 「Aく」の部分は補部でもあり付加部でもあるという構造と意味にずれに関する一種のパズルが得られるのである。

ただしこれは「Aくする」に特有の問題ではなく、「ふるまう」を様態修飾しているように見える要素がふるまう内容として必須であるのに似ている。

(15) 太郎は * (明るく／花子の保護者のように) ふるまった。

4.2. 「Aく」と「する」の関係

動作タイプの分析における問題点としてさらに、2.2で取り上げた形容詞部分と「する」の間の選択関係をどのように捉えるかというものが挙げられる。

これは、「する」という要素が動作を表すことをどのように保証するのか (状態変化 (の使役) の「する」との棲み分けをどのように捉えるのか) という問題とも密接に関わっている。動作を表す「する」という語彙項目があり、その語彙的性質として一部の形容詞と選択制限を持つと仮定すれば動作タイプの派生自体は導くことが可能になるが、ほぼ記述をそのまま置き換えただけで

ある。

この問題に取り組む上で、そもそも「する」だけにこのような意味・機能を担わせて良いのかという点について指摘しておく。

(16) 太郎がさっきから花子に 優しい／厳しい／冷たい。

(16)に見られるように、動作タイプに生起する形容詞は形容詞自体をいわゆる stage-level predicateとして用いることもでき、また「そのようにふるまう」含意も感じられる。すなわち、形容詞の方にも動作と結びつきやすい性質があるのではないかという可能性が存在するのである。

また、「Aく」と「する」の統語的關係に関する問題として、(14)で採用されている小節 (small clause) 分析の可否が挙げられる。

Fukumitsu (2001) は状態変化タイプを取り上げ、「Aく」の部分と「する」の部分で2つで1つの述語を形成する (LFにおける編入 (incorporation) が適用されている) と述べている。(17a, b) に示すように、「Aく」の部分を書頭にかけまぜ (scrambling) すると非文法的になることから、「Aく」と「する」は統語的には緊密な結びつきを持っていると Fukumitsu (2001) は主張する。

- (17) a. ジョンは鍋のお湯を熱くした。
 b. *熱くジョンは鍋のお湯をした。
 (cf. ?忙しくジョンはなった.)
 c. ??優しく太郎は花子にした。
 d. ?静かに太郎はした。

動作タイプについて同じようなテストを試みると、(17c) のように許容度はかなり落ちるようである。ただし、筆者の内省では、状態変化タイプよりは若干良いように感じられ、二句がない「静か」の動作タイプではさらに許容度が上がる。また、非常に微妙な差ではあるが、(18a, b) に示すように短距離かけまぜ (short scrambling) では両者の差がよりはっきりするのを感じる。

- (18) a. *ジョンは熱く鍋のお湯をした。
 b. ??太郎は優しく花子にした。

以上の差が事実として確かめられれば、状態変化タイプと動作タイプでは「Aく」部分と「する」の統語的関係が異なっているという分析を支持する。

また、Yokoyama (2012) が「感じる」などの述語が取る形容詞句への小節分析を支持する経験的証拠として否定極性項目 (NPI), 「自分」, 尊敬語化という3つの現象を提示しているが、これらのテストをそのまま「Aくする」に適用するのは難しそうである。以下、関係のある例文を作成することができるNPIについてのみ見る。

(19a) が非文法的なことは、小節が統語的に節を成しているということを示している。すなわち、「ジョンしか」は主節、「しか」を認可できる否定要素は小節内にあってNPIの同節要素条件⁷ (clausemate condition) を満たしていないからであると分析できる。

状態変化タイプについては、(19b) が非文法的なことから同じ分析が適用できそうである。

一方で、動作タイプについてはそもそもシカ句を用いたテストを適用することができないようである。(19c) に示すように、シカ句の存在にかかわらず、その補部内にそもそも否定が生起できない。同じ形容詞でも「Aくなる」では可能である。

- (19) a. *ジョンしか [ジョージを (その仕事に) ふさわしくなく] 感じた。
(Yokoyama (2012) の (12a), 一部改変)
- b. *太郎しか [部屋を暗くなく] した。
- c. *太郎が花子に 優しく／厳しく／冷たく なくした。
(cf. ?太郎しか花子に 優しく／厳しく／冷たく なくなった)
- d. 太郎が部屋を暗くなくした。

(19d) に示すように状態変化タイプでは「Aく」部分を否定にすること自体は可能で、これも状態変化タイプと動作タイプの間に構造的な違いがあることを示唆する。

また、そもそも「自分」および尊敬語化を用いたテストでは、動作タイプを用いたテスト例文のパラダイムをうまく形成することが厳しい。

以上のことから、Yokoyama (2012) の小節分析を検証するテストは少なくとも動作タイプにそのまま適用することはできない。

5. おわりに

5.1. 展望

「Aくする」を用いたさらなる研究の可能性として、形容詞のスケール構造 (scale structure) と動詞句のアスペクトの関連が挙げられる。

形容詞のスケール構造と形容詞派生動詞のアスペクトには体系的な関係がある (Hay et al. (1999) など) ということは英語などの言語ではかなり詳細に明らかになっているが、日本語についてはそれほどはっきりしない点が多い。

たとえば、井本 (2008) では英語に見られるような対応が日本語の -me/-mar 動詞化では同じようにならないことが指摘されている。

- (20) a. 部屋が だいぶ／とても／??／#⁸ ほぼ 暖かい.
 b. 部屋を だいぶ／??／とても 暖めた. (井本 (2008) : 217-218)
 c. 部屋を だいぶ／とても 暖かくした.

(20a, b) の対比に見られるように、「暖かい」は形容詞の場合は副詞「とても」と共起可能であり open scale として振る舞うのだが、-me/-mar で動詞にすると「とても」との共起は難しくなり closed scale の特徴を見せる (井本 (2008)). これは英語の形容詞派生動詞がその派生においてスケールに関する性質を保持するのと対照的である。

ここで、「Aくする」のパターンについて見てみると、(20c) に示すように、形容詞のスケール特性をそのまま受け継いでいるように見える。「Aくする」は句の形成であるからこのような性質を保持するのはそれほど驚くようなことではないとも言える。しかし、たとえばここから、日本語では「く」に対応する主要部 Pred が構造的にスケール性を担っているという分析につなげることもでき、スケール構造に関する対照研究だけでなく、日本語の形容詞文の分析に新たな切り口を提供できる可能性を秘めている⁹。

5.2. 問題点

以上、本稿では「Aくする」という形式において形容詞句から動詞句を形成する現象の研究において、状態変化タイプ、動作タイプ、テイルタイプの3つのタイプに分ける必要があることを示し、分類の根拠の提示と、動作タイプに関する基本的な記述を行った。また、分析の可能性、方向性について、統語

論的な観点を中心に問題点と関連する現象を整理した。

それぞれのタイプにどの形容詞が生起できるのかさらに網羅的な調査を行う、統語的な分析、意味的な分析の精密化と経験的議論の蓄積等、残された課題は多いが、この現象は語形成だけでなく、日本語のアスペクト、スケール構造、句と語の境界、節性といった一般的な問題に対して新たなデータと知見をもたらすものと期待される。

謝辞

本稿はMorphology and Lexicon Forum 2013（慶應義塾大学，2013年9月）における発表「動作動詞句を形成する「形容詞ク形+する」の性質と構造」を基にしている。フォーラムおよびその前後に多くの方からご質問・コメントを得ることができた。また、草稿の段階で石田尊氏より重要なご指摘をいただいた。記して感謝したい。本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任である。

本研究の一部は、日本学術振興会科研費「屈折・派生形態論の融合のための分散形態論を用いた日本語の活用・語構成の研究」（若手研究（B）、平成25年度～平成26年度、研究代表者：田川拓海、課題番号25770171）、同じく科研費「分散形態論を用いた日本語の時・法と語性の形式的研究」（平成27年度～平成29年度、研究代表者：田川拓海、課題番号15K16758）による援助を受けている。

注

- 1 ここでの「A」にはいわゆる形容動詞／ナ形容詞も含む。
- 2 (2e) に示すような「する／させる」の交替という観点からは楊（1986）、黒田（1990）、森（2004）といった研究が存在する。
- 3 これらの語は「Aくふるまう」と言い換えることができるものが多いが、一部言い換えが難しいものもある（石田尊氏，2016年11月28日，個人的談話）。
- a) *よくふるまう／*大事にふるまう／??うるさくふるまう
「Aくふるまう」との言い換えは、「Aくする」が表す意味を考える上で参考になる表現ではあるが、何らかのテスト／基準に用いることが出来るほど安定した現象ではないようである。
- 4 以下、事例はすべて現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）による。
- 5 「Pred」はNishiyama（1999）で提案されている叙述を担う機能範疇である。Nishiyama（1999）の分析が妥当であることは田川（2009）でも独立した言語現象の分析を用いて示した。
- 6 「√」は分散形態論（Distributed Morphology）において用いられる範疇未指定の統語的要素である「Root」を表している（Halle and Marantz（1993）、Arad

(2003), Embick (2012) 等を参照). 語以前の品詞が決定されていない形態論の単位を仮定するという分析は日本語研究では珍しくなく(斎藤(1992)など), 川端(1979)の「形状言」, 小柳(2011)の「情態語基」などの概念も発想としては似ているが, その形態論的単位そのものに状態的な特徴を持たせる点等違いもある.

- 7 日本語のNPIに関する同節要素条件と関連現象の概要および先行研究のまとめについては, 片岡(2006):123-138を参照されたい.
- 8 「ほぼ暖かい」が許容されるのは「部屋の大部分の空間が暖かい」という解釈の場合(井本(2008):217)である.
- 9 また, -me/-marで動詞化できないclosed scaleを持つ「完璧／垂直／空っぽ」なども「Aくする／なる」の形式にはすることができるので, 英語などとの対照研究の幅が広がる可能性もある.

引用文献

- Arad, Maya (2003) “Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs,” *Natural Language & Linguistic Theory* 21. pp.737-778.
- Baker, Mark C. (2003) *Lexical Categories; Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge University Press.
- Embick, David (2012) “Roots and features (an acategorial postscript),” *Theoretical Linguistics* 38(1-2). pp.73-89.
- Fukumitsu, Yuichiro (2001) “Covert incorporation of small clause predicates in Japanese,” Maria Cristina Cuervo et al. (eds.), *Formal Approaches to Japanese Linguistics 3 (MITWPL 41)*. pp.251-266.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the pieces of inflection,” *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*. Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), pp.111-176, The MIT Press.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) “Scale structure underlies telicity in ‘degree achievement’,” *Semantics and Linguistic Theory* 9. pp.127-144.
- 井本亮(2008)「日本語の形容詞派生動詞をめぐって」『言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究(日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)』, pp.210-228, 筑波大学人文社会科学研究所.
- 片岡喜代子(2006)『日本語否定文の構造: かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお出版.
- 川端善明(1979)『活用の研究』大修館書店.
- 小柳智一(2011)「上代の動詞未然形—制度形成としての文法—」『万葉語文研究 第6集』pp.71-88.
- 黒田成幸(1990)「使役動詞の自立性について」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『文法と意味の間 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』pp.93-104, くろしお出版.
- 村上佳恵(2012)「現代日本語の形容詞分類について—様態のソウダを用いて—」『日

- 本語文法』12(1), pp.20-36.
- 森篤嗣 (2004) 「形容詞連用形に後接するスルーサセルの置換について」『日本語教育』120, pp.33-42.
- 中谷健太郎・影山太郎 (2009) 「第1章 語彙的アスペクト」影山太郎 (編) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 pp.14-42, 大修館書店.
- Nishiyama, Kunio (1999) "Adjectives and the copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8. pp.183-222.
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』 ひつじ書房.
- 杉岡洋子 (2009) 「第6章 形容詞から作られた動詞」影山太郎 (編) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 pp.191-222, 大修館書店.
- 田川拓海 (2009) 「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究」筑波大学博士論文.
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成』 ひつじ書房.
- Yokoyama, Tomohiro (2012) "Small clause: Evidence from Japanese," *Proceedings of the 2012 annual conference of the Canadian Linguistic Association*.
[<http://homes.chass.utoronto.ca/~cla-acl/actes2012/actes2012.html>]
- 楊凱榮 (1986) 「「XガYヲZニスル」構文と「XガYヲZニサセル」構文との異同について—Zが形容詞の場合—」『言語学論叢』5, pp.17-30, 筑波大学一般・応用言語学研究室.